

## 第二の覚醒

### ——アボリジナル口頭伝承の十七世紀——

竹 内 佑 利 子

#### 一 はじめに

オーストラリア大陸の懷に入らずに原住民アボリジナル諸部族が伝えてきた口承文芸を理解しようとするのは、至難のわざである。宇宙の造物主はオーストラリア大陸に、自然のすべてを集めた。海、珊瑚礁、細い地峡でへだてられている幾つもの湖、沼地、無数の中島のあいだをうねり流れる大河、雪山、大山脈、砂漠、肥沃な緑地、熱帯雨林、世界最大の一枚岩。自然界の巡礼は、オーストラリアで間に合う。そのうえ、オーストラリアの自然界に存在する一つ一つのもの、砂漠にころがっている石の一つ一つ、ユーカリのそう林にひととき目立つ巨木、水の湧き出るウォーターホール、水の枯れたウォーターホールの跡、川の湾曲部のアシの茂み、何万というスイレンの花が浮かぶ大池、そのどれにも、口承文芸は言及している。

一九九一年五月、サウス・オーストラリア州のナラン

ジェリ部族の人々から、部族に伝わる創造先祖の話聞かせてもらった。伝承のない手たちにとって、「ドリームタイム（夢の時代）」といわれる創世神話時代の教えは、現代オーストラリアに生きる今も有効であることを知った。小文では、謙虚に見積っても何千年間の歳月を、口頭伝承の形で生き延びてきたアボリジナルの夢の世界について考えたい。

#### 二 大地の子どもたち

M・クラーク（一九一五—一九九一）は、原住民をそっけなく扱っている歴史書の中で次のように書いている。

「オーストラリアには、もともと二つの文化が存在して今日に至る——一つはアボリジナル文化であり、もう一つはヨーロッパのそれである。・・・アジアおよび近隣諸島がバーバリズムから文明へ次第に進歩をとげていた間も、（オーストラリア大陸およびタスマニア島の）アボリジニーズは、原始的な石器文化にとどまっていた。

農耕に適した植物と、家畜化できる動物がいなかったことが変化が起きなかったおもな理由だろう。だが、彼等の宇宙観もこれに関わっていただろう」(一九六三)。

これだけである。「彼等の宇宙観」の何たるかについては述べられていない。オーストラリア社会における多元文化の一番古い柱のはずであるが、クラークと対照的な史観をもつのは、オーストラリアと同じく大英帝国の植民地だったニュージーランドの歴史を執筆したK・シンクレア(一九二二)である。彼はニュージーランド先住民マオリの創世神話から説き起こす(一九五九)。

彼の歴史書の邦訳版(初版一九八二)は、前半は「おとぎ話風で歴史書にふさわしくない」と不評であったが、複数文化共存の受け入れに及び腰の我が社会では当然の反応だろう。ただし、クラークのためにいえば、大陸占有に関する了解は、アボリジニーズとヨーロッパ系の人々をバラレルな関係においている。時間の流れをさておけば、クラークなりにデモクラティックな史観といえるかもしれない。シンクレアのほうは、先住者＝被征服民族に対するヨーロッパ人＝征服民族の図式を用いておりやや思い込みがある。

ミシェル・パノフの論文「オセアニアの神話」は、オーストラリア原住民についての一般的な了解を出ていない。「(推定人口三〇万は)驚くほど少ない……苛酷

な自然や、これらの人間集団の極度に初歩的な生活様式を結びつけて考えられるべきである。農耕も製陶術も知らず、ディングゴ犬以外に家畜ももたず、彼らは狩猟と採集の放浪生活を送っていたのである。だが、甚だしい窮乏という共通性があるからといって、オーストラリア諸社会を完全に同質的なものと思ってはならない」(一九六三)

クラークやパノフへの疑問は幾つかある。「農耕に適した植物と、家畜化できる動物」が大陸に存在しなかったゆえに、アボリジナルは「石器文化にとどまっていた」のだろうか。オーストラリア諸社会に共通していたのは「甚だしい窮乏」だけだったのか。クラークのあるいはパノフの論評の基本、つまり、西欧の歴史と発展のパターンが人類の豊かさと幸福に至る唯一の型であると評価する発想は、どうやら絶対的なものでもないらしいと、私たちは気がつきはじめているのではなかったか。さらに、オーストラリア原住民の世界を見渡すとき、大地の広さは、地形の複雑さは、人口は、動植物の種類は、地下の大水脈は、往来を妨げる地理は、考慮されたのだろうか。「彼等の宇宙観」は、詳細に言及する価値のないものなのだろうか。原住民の窮乏は、大陸全土に共通だったのだろうか？果して、窮乏があったのだろうか？石器文化にとどまっていたのはたしかだが、農耕および家畜化が

必要だったか、それらが発達したと仮定して、アボリジナルの暮らしはどう豊かになったのだろうか。

大英帝国植民地オーストラリアは二百年前に建設された。それ以来白人政府は一九六七年まで、原住民を「オーストラリア大陸の生きもの」あるいは「ネアンデルタール人」扱いしてきた。原住民が石器文化にとどまり鉄器文化へ進歩しなかったのは、原住民の知能程度と関わりがあるかといった気持ちもほの見える。四半世紀前まで、「アボリジニーズには、小学校までの教育は可能、それ以上はとても無理」と公言する人は少数派ではなかった（ロビンソン、一九六六）。しかし、一九七〇年代から活発になったアボリジナル自身による文化復興運動の進め方が、知能に関するいいがかりに対して根拠なしと答えている。この文化復興運動を支える奥深い発想については、のちほど述べる。

アボリジニーズの人口は、ヨーロッパ人渡来以前は大陸でおよそ三〇万、タスマニア島で三千人といわれている。このあたりは推定にすぎない情報をもとにしているのだが、三〇万人のアボリジニーズは、およそ六百の部族に分れ、おのおのの部族が異った言語（方言を含む）を使っていたといわれる。一つの部族に属する人数は、五百人から五千人までと幅があったらしい。部族はさらに小さい集団にわかれ、境の線をへだててそれぞれのテ

リトリに隣りあって住んでいた。つまり地理分布上からいえば、集団は六百と数えていい。

日本の二〇倍以上もある大陸に、六百の集団が暮らしているようすを想像してほしい。日本列島に、わずか三〇の集団が散っているという計算になる。六百の集団の中でたがいに近くにいた集団は、往来し、物々交換をし、情報交換もしたらしい。また、ときには全く言葉の通じない、そして外見も異なる個人あるいは集団と出会ったこともあった。それらの出会いは大きな事件だから、伝説の中に悪魔とか妖精などとの遭遇として記憶されている。けれども、他部族と全く出会わなかった部族もたくさんあるだろう。石器文化は、ナランジェリ部族の首長のいうように、自分たちにとってはそれがいちばん（テリトリの）大地に合った暮らし方だからこそ維持された。大陸の先住者たちの文化がどれも石器時代のものから発達しなかったとしても、足並み揃えて石器文化を選択し至高のものとしてはぐくんできた結果ではむろんない。つまり、大陸のどこかで、全く異なった文化が、鉄器を使った文化が、あるいは農耕や家畜化を進めた文化が発達して、他の部族はそれを知らないでいてもいいわけだ。例えば千年前に、赤道に近い北部準州のアランダ部族が石器を、南極に近い南部のナランジェリ部族が鉄器を使っていたって理論上のふしぎはない。一続きの土地

で発達の違いがある例は、現代ですらいくらでも挙げられる。ところがオーストラリア大陸では、ほとんどの集団が類似の石器文化を営み、遊動生活あるいは半定住生活（季節ごとの移動）を送っていた。大陸の先住者たちはどの部族も、石器文化で満ち足りていたと仮定してよいのだろうか。彼等もいずれ人口増加に伴う食糧問題の解消のために、農耕や家畜化への道を歩み、鉄器ももつようになつたかもしれない。けれども今から二百年前まで、時間はゆっくり流れていた。彼等をせかせかと明日の発明へいそがせる要因は、外圧であれ人口過剰による貧困や争いであれ、少なかった。のちに述べる第一の覚醒時において、すべてが予測なされ、すべての法則は取り決められた。それ以上、何が必要だろう。「すべての一日は——きのうも、きょうも——生きていくだけで精一杯の一日」（バルバース、一九八四）というのが「ほんとうのところ」ではなかっただろうか。しかもそれは充足した一日であつたはずだ。このことをのちにナランジェリ部族のところで述べたい。

大地の子どもたちは、ギリシアやローマの神殿も知らず、東洋の黄金の国も知らず、印刷された本を手にして人々のことも知らなかった。夢の時代の掟にしたがつてサバイバルの一日一日をすごしていた。人間が自然を征服するという概念もなかった。万物の霊長である

いう自覚を支える哲学は、進化論に基いたものではなかった。もてる者ともたざる者と、そういう分類の仕方では人間を分け得るということを知らなかった。知らないことで、不幸ではなかった。ただ、遠く北半球で白い翼をつけた海鳥が、幻の南方大陸の搜索の命をうけた探險家という部族を背に乗せて、大海原へようとしていることも知らなかった。彼等に欠けていたのは、第二の覚醒がこんなに早く——大陸を占有してからわずか五万年か十万年かのちに——やってくるという情報であつた。

オーストラリア大陸全土およびタスマニアの先住者たちが、共通して窮乏に苦しんでいたとする証拠はない。むしろいかに多種多様の豊かな食生活を、不足ない衣および住生活を送っていたかが、J・ブレイニーによって明かにされている（『アボリジナル』一九八二）。西欧では、農耕が始まり定住生活と共同体が人間の多数派の選ぶ生き方として定着した時代に飢餓や貧困や若年労働はより厳しくなつた。農耕によって作物の種類を特定する。いったん天候が悪くなつたり害虫が発生したりすると、融通がきかない。飢餓に襲われる。これは定住社会の不便さの単純な一例にすぎない。ブレイニーが証明するのは、アボリジナルの物質的豊かさである。家をもたない、畑をもたない、着替えをもたない。もっているのは、広大な土地である。恵みを惜しまない土地である。



母（先祖）なる大地を、現在生きている人々が母のように世話すれば、土地は（例え一区画がだめでも、ほかにいくらでもあるし）生きていくうえに十分なものを与えてくれる。アボリジナルはそう信じている。クラークもアボリジナルと土地の密接な結びつきについて、目を向けなかったわけではない。だが、結びつきの強靱さを計りかねただけか、「彼等の宇宙観」の洞察は深まらない。我々はクラークからあまり助けを得られない。

パノフはどうか。パノフはオセアニア神話に共通する基本的特長として「人間が自らの思考と行動を従わせるべき理想的模範を、最も遠い過去に、一般的には世界の始まりの時点に置こうとたえず気を遣っている」（一九六三）ことをあげる。後の章で述べるナランジュリ部族の人々から聞いた話のように、その通りのことを私も体験している。パノフは、オーストラリアほかオセアニア地域の神話の考察から、この特長を導き出した。私をナランジュリのユーカーリ樹林へ導いてくれたのも神話だった。

西オーストラリア州のアボリジナルの画家サリー・モーガンは、「大地はあなたのものではない。あなたが大地のものなのだ」と、「口伝」で教わったという。やはり、オーストラリア・アボリジニーズに関わる疑問の数々を考えるためには、口頭伝承にあたりたい。それが試

論の初めとなるのではないだろうか。

### 三 第一の覚醒

アボリジナルの口頭伝承は、多くの人々が採話して出版している。私がローランド・ロビンソン（一九二一）の採話集（一九六六）から幾編か神話を選んで邦訳紹介したのは五年前である。デイジー・ベイツ（一八六一—一九五一）の採話にもひかれ迷ったあげく、ロビンソンを選んだ。その経緯を簡単に述べる。

ベイツは四〇年という長い月日を費して、オーストラリア原住民の暮しと口伝を記録したアイルランド女性である。最後の十六年間は、ナラボー平原のアボリジナルの中で暮し、夜ごとに口伝を聞き書きした。白いお祖母さん（カバルリ）と慕われるほど、アボリジナルの一員になりきっていた。彼女は望んだけれども、生きている間に聞き書きした話が本にまとまって出版されることはなかった。当時彼女がたまに通る汽車にたくして町に送った話は、新聞の埋め草として使われただけだった。ベイツの業績を死後に認めた人々は、原稿を集め、編者の名を付してイラストもつけて刊行した。収められた話は、長さも同じように揃えられ、かなりこじんまりとまとまった物語ばかりである。編集にあたって、ヨーロッパ昔話やギリシア・ローマ神話になじんだ人々が理解しやす

いようにとの配慮がなされ、力強さが薄まっている。ペイツが砂糖や小麦粉の袋の裏がわに書きとめた原稿は博物館に収まっているが、そのままの形で読者に提供されるべきである。

いつぼうロビンソンはベイツほど長い間、アボリジナルの人々と関わっていない。時代も新しい。ヨーロッパ文明に同化させられたアボリジナルも増えた時代の人である。けれど白人の同化政策にも関わらず、居留地にとどめられたり、白人とまじわることを禁止されたためにフリンジ（周縁）居住者として長い年月を送るアボリジナルも多かった。そのためロビンソンのいうように、シドニーに近いような地域でも、口伝は絶えてしまっていた。私がロビンソンの採話集を選んだ理由は、本の編集をしようというのに矛盾するようだが、詩人である彼が「本はアボリジニーズの文化を伝えるのにふさわしい形ではない。アボリジナル口伝は、詩と同じく聞かれるべき文学である」と述べているのを知ったからだだった。そのときの私は、五年後にアボリジナルの語りに耳を傾ける日がくるなどと思っていたから、せめて口伝の本質を知る彼の話を訊出しようと思ったのである。

ロビンソンはある夜、ノーザン・テリトリのジャワン部族の人々とともにキャンプの火を囲んですわっていた。大コウモリ（フルーツコウモリ）が出現する季節

で、火の上では、大コウモリがおいしそうなにおいを放って焼けつつあった。そのとき、一人の老人が、「まだ火がなかったとき」と語りだしたという。ロビンソンはすぐにこれが「ドリームタイム（夢の時代）」の語りだとさとした。以来ロビンソンは、十七年間、大陸北部で中央で東南部で、アボリジナルの話を聞き書きした。

アボリジナルの創世神話は、夢の時代といわれる時期に起こったものを記録する口承文芸である。そこで活躍するのは、河口から姿をあらわしたというクーナビツビ（大地母神）であり、最高位のトーテムは虹蛇である。虹蛇は大陸をくねくねと旅し、その跡に、山や谷間や川や平原ができた。それだけでなく、虹蛇は行く先々で、人々に文様と歌と踊りを定めた。コロボリー（祭儀）を行うこととそれに必要な全てを伝授し、それぞれの部族の印を定めたと伝える部族もある。コロボリーの際に部族の民は決められた文様を白粘土あるいは紅土で体に描く。コロボリーには、天の川の星となった先祖たちも天から下ってきて歌や踊りに参加する。

夢の時代というからには、夢の終わりもあるわけだが、夢は、創造主たちが使命を果たし終えたときに醒めた。アボリジナル口頭伝承における第一の覚醒である。

ロビンソンは、聞き書きに触れて、北部や中央部のアボリジナルが伝えてきたクーナビツビ（大地母神）の話

のほか、虹蛇神話や悪魔の犬の神話を各地で聞いたといっている。ノーザン・テリトリイでも聞いたし、ニュー・サウス・ウェールズ州でも聞いた。それにまつわる善霊や悪霊も、南北両地域に共通して伝えられていると記している（一九六六）。さきに全く出会わなかった部族もあるだろうと書いたが、伝承に共通する部分があるとすれば、出会いがあったのではないか、矛盾するではないか、という疑問がでそうだ。しかし、パノフの、「オーストラリア諸社会を完全に等質的なものと思つてはならない」という記述は、何万年も離れて出会わなかったための質的变化に言及しているとみなすことができる。そしてやはりパノフのいうように「神話資料の採集も、地域によつては大きなむらがある」（一九六三）のは事実である。ロビンソンの記録によつて、質量ともに共通しているところが多いと理解することは危険だと思う。ただし、年月をどうとらえるかによつて矛盾は解消される。

アボリジニーズがオーストラリア大陸を占有したのは三万年から五万年らしいというのは、大方の歴史書や事典の記述に共通している。だが、最近アボリジナルの文化復興運動に関わる人々の中には、アボリジナルの大陸占有の優位を強調するために、十萬年前から大陸に居住していたという説をかつぎたい気持ちがある。その議論

は考古学者にまかせるとして、例えば三萬年前にわかれた人々（の子孫同士）が、その後三萬年の間に出会わなかったということはあり得るだろう。つまり文化の質的变化をたがいに認識する機会がなかった部族もある、という意味である。

ただし、ロビンソンのいうように非常に似通つた話が伝えられているという事実は否定できない。「口伝の正確さ」は、文字をもたない民族の大きな特長である。私たち文字人間の多くは、口伝えの話がどれほどゆがめられ間違つて伝わるかを、一つ二つの古傷の痛さとともに知っている。書類と印鑑（署名）の信用はそこからきている。けれど、無文字民族の口承文芸は、日本のあるいは西欧の昔話などと同じレベルで受けとめられない。私はニューギランド先住民マオリの口伝を聞いたことがある。彼等は四〇世代以上の部族の名前を正確にたどり繰り返す。また、類似の神話や伝説が広くポリネシアの島々に流布しているのは知られている。ポリネシアの海洋民族は離合集散を繰り返して、太平洋の三角形といわれるポリネシア海域にそれぞれ定住地を定めた。彼等が伝える神話や部族伝説は、現在の定住地に移る前から伝わっていたに違いない。同じように、アボリジニーズがオーストラリア大陸へ移住し分散する前に、創世神話の大筋は語られていたものと推察できる。

オーストラリア大陸であれ、アボリジニーズがその前にいた土地とされているボルネオであれスラウェシであれ、どこであれ神話を創り伝え始めた人々のいた地で、虹の色をした大蛇がくねくねと地面を削ってのたくり大が人を呑込む話が発生したのだ。口頭で伝承されてきたその話群を、アボリジニーズは夢の時代の物語と呼ぶ。夢の時代は、英語ではドリームタイムであるが、部族の言語によって、アルチェリング、ビエインガナ、カルドールレアなどといわれる。そしてこの夢の時代という名前はそのまま、神話先祖の部族名でもあった。

神話の中の先祖たち、つまりアルチェリング部族の民、ビエインガナ部族の民、カルドールレア部族の民と呼ばれる先祖たちは、トーテムとする獣や鳥や魚に変身することとができた。そして夢の時代に全ての地理風土が定まり、全ての命あるものの「形」が決まった。人間の形も、動植物全ての形状も決まった。

それだけではない。儀式や掟、社会組織、信仰、通過儀礼についても決まった。狩りや食料採集、調理法も決まった。そして、魚の釣れる漁場、水の湧いている土地、木ノ実の採れる森の位置が決まった。全てが定まると、創造主は、その土地になった。最期の変身は、大地への同化だったのである。創造主自身の体が、漁場になり、泉になり、森になった。これらの土地の特性は全て、ア

ボリジナルの衣食住に関わり、生存に関わっている。アボリジナルの足跡は、これら夢の時代の先祖の体から一歩も出られないことになる。

アボリジニーズは、夢の時代のできごとを見てきたように語るが、それは夢の時代の創造主が大地に同化していく時期、人が夢から醒める時期、第一の覚醒の最中を「見てきたように語っている」のだと私は思う。夢の時代に存在したのは、創造の決定をなす「意志と力」をもったものたちと、人とはいえ変身自在で、まだこれから人間として生きるか、あるいはカンガルーとして生きるか、決っていない人たちだった。語り部となるべき人間もいなかった。

現場目撃者は、夢から醒めなければならない。魔法は終わり、目覚めてみれば、現実の世界が誕生しようとしている。第一の覚醒期の現場には、創造主の最期の営みがあり、人間が登場する。夢の時代にはみな人間だったけれど、人間の中には、鳥や獣へ二度と元に戻れない変身をとげたものが出て、それも覚醒の段階で起こったことだった。

ここにあらすじを書く話（ロビンソン、一九六六）は、夢の時代からの覚醒がどのように語り伝えられているかの一例である。

「エリンチャ・ヌーリヤ」

夢の時代に、一人の老人がいて、楯とブーメランをもっていた。老人が眠っていると、風が東西南北から吹きつけてきて、老人の体は土や砂でおおわれてしまった。風がやんで老人は起き上がった。老人の姿はエリンチャ・ヌーリヤ（有袋類のデビルドッグ）になっていた。犬は砂山から出ると、南にむかい、池をすぎ、クリークのほとりて蛙を集めている二人の娘の足跡を見つけた。犬は足跡をつけて、峡谷や山を越えた。娘たちは火を起こしてカエルをあぶり、ユーカリの木の下にキャンプをはった。

犬はこっそり近づき、姉も妹も吞込んでしまった。それからクリークぞい下っていった。コロボリー（祭り）の音が聞こえた。長老たちが若者に、部族のしきたりや掟を教えているところだった。儀式がすむと、皆列になって眠った。犬は男たちをぜんぶ吞込んだ。

そこへ人間の若い男がやってきた。長老の手をはなれて飛んでいった祭りに使ううなり板が、地面に落ちたとたん、人間に変わったのだ。男は、板が飛んできた方角に走っていった。とちゅうで、木の根元に刺さっていた石槍を投げつけた。石槍は、犬の口に命中し、犬の裂けた口から、腹の中にいた人々が皆とびだしてきた。

犬はその場で地中にもぐり、もとの土地へもどると、

また老人にもどった。

老人は地面に横たわっている。風が四方から吹いて、土と砂で老人の姿をおおいかくす。老人はときどき起き上がり、また横になる。また風が吹く。

（語り手・トナンガ、アランダ部族）

老人は、大地に埋もれて、犬に姿を変える。これは老人が夢の時代のトーテム先祖だからである。楯は戦いのブーメランは生活手段として狩りをする民族の象徴である。語り手にとって話の中の砂山、池、クリーク（蛙が採れるところ）、峡谷、山は、それぞれ実在し、暮しに必要なものを恵んでくれる土地だ。部外者にとっては、ひどくぼうばくとした話に思えても、聞き手たちにとってはなじみのある具体的な場所ばかりで、いちいちうなぎずきながら老人や娘たちや男の足跡を脳裏で辿ることができる。

アボリジナル文化の重要な要素の一つは、通過儀礼である。成人式は男女とも受けなければならない。娘たちは、食料をさがしてくるように出される。これは少年たちを林や森にサバイバルゲームに追い出す男のための試験と同じく、女のための通過儀礼の試験の一つである。犬が娘と男たちを吞込むのは、死を経て再生する通過儀礼の象徴である。

けれど、成人式をとくにすませ秘伝を授かっているはずの長老たちも吞込まれた。ここで私は、成人式と夢の時代からの覚醒が同時に行われたのだと思う。覚醒時には、人間のままでいる人間と、人間以外のものに変身する人間とがいた。犬の腹に入つてのち、人間の男によつて救出された人々は、覚醒ののちも人間としての姿を保ち続けることが約束されたのではないだろうか。

老人は元の地に戻り、土と砂の中に埋もれる。この場所とは特定されている。アポリジナルの話は、常に部族のテリトリ―と結びつけられて語られる。「エリンチャ・ヌーリヤ」は、アポリジナル名をウンゴルタレンガ、現在白人がバート・ウェルと呼んで牛の水飲み場にして湧き水の近くがその舞台である。そこにいまでも老人は横たわっている。老人は、夢の時代の民であり、全ての使命を果たし終えて、オーストラリアの大地に同化したのである。モーガンの「あなたが大地のものなのだ」という宇宙観は、創造主の最期の変身に源を発する。

人間の若い男がなぜ突然登場したか。これは、うなり板のせいである。うなり板は、トナングの部族のことばではナマツーナと呼ばれる。平たい板の端に穴を開け、髪の毛を編んだ紐をつけたもの。振つて投げると、牛のうなり声みたいな音を立てて遠くへ飛んでいく。この音は、出産のときに女が発する声と似ている。うなり板の

落ちた所に誕生がある。北の河口から登場するクーナビツビも、これに似た音を立てて誕生に至る旅をしたときれている。

しかし人間は誕生しただけでは、不十分な存在だ。大人にならなければならない。若い男は道中、石槍を入手する。槍は大人の男性の象徴であり、それに対して大人の女の象徴はイグサなどで編んだかごである。石槍を入手したことにより、男は男らしさを完成する。その力で、男は犬の腹の中の人々を解放できたのだった。

老人は、帰路は地中を旅する。夢の時代は終わったからだ。そして地面に横たわる。ときどき起き上がることを意味は、アポリジナルでなくても、私たちはよく知っている。大地がときどき示す意志ほど、恐いものはないからだ。大地は生きているのである。

ロビンソンの聞き書きした話だけでも、アポリジニーズが伝えてきた神話の主人公や舞台が多種多様であることがわかる。それでいて大地母神や虹蛇や有袋類の犬や、その他共通する要素は多い。そして夢の時代にと語り始めるけれども、じっさいにはさきほどいったように夢とうつつのマジナルなところを語る。

ロビンソンが収めた話の一つに、とても長い「虹の大蛇」がある。トーテムを虹蛇とする父親と、トーテムをオウムとする娘たちが、まず登場する。娘たちは夫さが

しの旅に出るが、氣に入らない男につきまとわれたので、帰ることにする。娘たちは魔法を使ってスナバエを呼び出し、男をやっつけることもできるのだが、よい夫は魔法をもつても見つけられないらしい。しつこい男をだまして山から落しその体をばらばらにして、父親のもとに帰ってしまふ。

男の体は、ふしぎなことにまた元に戻る。そしてこりずに娘たちを追って、虹蛇の父親とその部族の者がいるところへいく。皆が眠ったところを、男が襲うと、黒い人々は、みなそれぞれがう種類の鳥に変わり、めいめい違う土地をめざして飛び立っていく。男も、コウモリになって飛んでいく。この鳥になった人々は、物語には二度と登場しない。このまま鳥になって、いまでも鳥なのだ。アポリジナルの人々は、夢の時代が終わったからだという。夢から醒めるのをきっかけに、すべて人間だった人々のうち、ある者はカンガルーとなり、ある者はロリキート鳥となり、ある者は月まで飛んでいつて月の人となった。夢が醒めた以上、二度と元の人間になることはない。幸か不幸か、人間のまま残った我々は、だから動物たちに対する責任が、昔の同胞を慈しみ世話をする義務があるのだという。

さて、虹蛇の父親の話は、まだ終わらない。父親は、妻と三人の息子を連れて旅に出る。そのときどきに休息

した場所は、じっさいにある土地で、今でも水が湧いている。独り旅をするならば、アポリジナルの物語をよく記憶しておいて、主人公たちと同じルートをたどれば、渴いて死ぬこともない。伝承物語にそった旅は、現在オーストラリアで試みられている。その結果、砂漠の地下に大水脈が発見されるなど、アポリジナルの知恵が確かなものであったことが証明されている。父親が一個おいていったこう丸は、丸石になって今もある。妖精の子どもたちの石といわれている。また父親は道中、長い木の笛をおいていく。これはアポリジナルの楽器ディジリデユ（木製の長い笛）である。ここの部族の音楽は、木笛が主になっている。

こうして父親は、部族のあるべき文化と地形を決めていった。最期に、父親は川へ入る。入水の動機は、他のトーテム先祖たちと同じである。もう用がない。言い替えば、するべき人がするべきことを全てし終わったとき、彼は退場し、夢は醒めるのだ。父親は、たいまつを手にかざして水中に入っていく。ところがそのとき、妻が息子たちを呼ぶ。「はやく、はやく。（おとうさんが）火をもっていってしまふ！」

息子の一人が川に飛びこんで、父親の手からたいまつをひたたくって岸に上がる。それだけ余裕があったら、父親を救助すればいいのと思うが、父親はすべての使

命を果したのだから、もうすることがない。救いの対象にはならない。夢から醒めてそのあとを生きる人間にとって大事なものは、火のほうであった。

息子には、たいまつのような弱い火が消えたら大変なので、とりあえずあたりの草原に火を移す。これはアポリジナルの火の保存法で、ひんぱんな野火は、例えば根に水を貯えるユーカリのようなユニークな植物を育てることになった。

燃えさかる草原で、母親は、息子たちに鳥におなりという。

「煙や火を見つけたら、そのまわりをとびなさい。トカゲやフクロネズミやバッタが逃げていくのを見つけたらどうかまえて、えさにしなさい」

こうして虹の大蛇一家の旅路は終わった。父親は水に入っただけ、虹蛇となって再生する。母親はマダラモズガラスになり、息子たちはそれぞれ、マグソタカとハヤブサとハイタカになり、いまでも草原の火事でいぶり出される小動物を空の上からねらっているのである。

ロビンソンの聞き書きした話を読むと、私なりにアポリジナルの世界を描くことができる。夢の時代に、自由自在の力、変身や呪いや祝福の力をもつトートテム先祖が「様式作り」を始めている。夢の時代後のあれこれを定めていく。男も女も、大人になるとはどういうことか、通

過儀礼はきちんと守らせなければならぬなどを決める。けれども、何よりも心を砕いたのは、生存に関わるものもろだったろう。人間に不滅の生命を与えないことにしたのは、人間をよくわかっていてからに違いない。いや創造主はけっこうユーモアに満ちていて、人間にたくさんの悪の芽を授けることにしたのかもしれない。夢の時代の物語には、人間のなす悪事の本が陳列されているのではないか。

こうしてそれぞれの部族の創造主は、全てを定めた。夢の醒めるときがきた。そして、まず目を開けたのは、語り部ではないかと思う。語り部たちは、夢の醒める過程をじっくりと眺めた。それが語り続けられている。

この想像は、べつの想像と重なる。それは大げさにいえば地球の歴史であり、人類の誕生であり、自然界の大きな流れである。変身譚の展開を絵に描いて想像していくうちに、新人の誕生するまでの過程、系統樹の分かれ方が浮かんでくる。自然界の摂理、大地のもつものもろの力はきちんと把握されている。アポリジナルの宇宙観は、今私たちが知っている科学のかなりどころまでを解明していたのではないだろうか。それを語り伝えることの重要性も、認識していたのではないだろうか。夢の時代に、「変身できる人間」がいた。彼等は、旧人、あるいは類人猿ではないだろうか。もっともこの想像は私



の妄想にすぎない。想像は（妄想を含めて）宝さがしという楽しい作業であるけれども、いまは白い翼の海鳥が先をいそがせる。もうすぐ十七世紀、白い鳥は赤道を越えようとしている。

#### 四 ヌランデリ豊じょうの旅路

虹の大蛇の話、エリンチャ・ヌーリヤの話、そして私の夢がかなってオーストラリアで聞くことができたナランジェリ部族の話も、旅をする人々の話である。イギリスのトム・ウィチントンや日本の一寸法師は、宝探しや運試しのために旅に出る。アボリジナルは、食料探しや異性を追うという目的が目に見える旅をする。アボリジナルが、語り手と聞き手たちの故郷であるテリトリの地理を、主人公たちの旅路に辿るのは、無文字民族の語りにおける工夫の一つでもあるだろう。覚えやすいように、けっして忘れないように。

しかし、旅にはそれ以上の意味がある。エリンチャ・ヌーリヤも虹蛇のトーテム先祖も、旅をしながら地形造りにいそしむ。同じように旅をするヌランデリは、オーストラリア、サウス・オーストラリア州のマレー川下流域およびクローン地域の、地形、風土の全てを創造した人である。この一帯に居住していたナランジェリ・アボリジナルにとって、第一の覚醒は、ヌランデリが天の

川の星になったときに起こっている。

ナランジェリの口頭伝承は、夢の時代に掟を定めた人、一帯の地形や生きものを創造した人ヌランデリの足跡を、次のように辿る。

#### 「ヌランデリの話」

ヌランデリは、二人の妻をさがしに、樹皮のカヌーに乗って、マレー川を下っていった。妻たちが逃げだしたので、追いかけていくところだった。

巨大な魚ボンデがカヌーの先に見えた。ヌランデリは魚を追った。魚をめがけて槍を投げた。が、槍は魚に当たらなかった。

川が湾曲しているところで、ヌランデリはもう一度、槍を投げた。巨大な魚はすごい勢いでまっしぐらに川を下っていく。

ヌランデリは、ネペレに助けをもとめた。ネペレの助けを借りてやっと、魚に槍を突き刺すことができた。魚はマレー川の河口から湖へと泳ぎ入ってそこで力つきた。ヌランデリはナイフで魚を切りわけ、たくさんの新しい魚を創った。

いっぽう、ヌランデリの二人の妻たちは、キャンプをたった。火をおこして、トウカリを焼いて食べていた。ヌランデリは魚のにおいのかぎつけて、妻たちが近く

にいることを知った。そこで自分のキャンプもカヌーも捨てて、妻たちをさがしにいった。

ヌランデリの足音を聞きつけたとき、妻たちはちょうどアシとグラス・ツリー（ユリ科ススキノキ属、ニオイシュロランの仲間、筆者註）のいかだをしあげたところだった。二人はいかだで対岸へわたり、いかだをおりると南へ逃げた。

ヌランデリも妻を追って南へいった。ところがそこで、偉大な魔術師パラムバイに出くわした。

二人は戦った。武器と魔術を駆使して戦った。ついに、ヌランデリが勝った。

ヌランデリは大きな火をおこして、パラムバイの体を焼いた。

そこから海ぞいに、北へむかった。キャンプをはるたびに、真水の穴を掘り、魚をとって食べた。

ヌランデリは、マレー川河口へむかってすすみ、湾をぐるりとまわっていくあいだに、巨木を海に投げこんだ。それからアザラシを一頭つかまえて殺した。それからまたキャンプをはり、魚をとったが、妻たちの姿はどこにも見えない。こみあげる怒りにまかせて、ヌランデリは槍を海に投げこんだ。

そのうちヌランデリはカイケの岩かげで休んだ。すると、浜辺のほうから、笑ったり水をかけてふざけたりし

ている、妻たちの声が聞こえてきた。ヌランデリは梶棒を地面にたたきつけると、妻たちのいるほうへいそいだ。妻たちは恐怖にあおられて海岸をすつとんで逃げ、半島の先の細い地峡を、向こうがわへいそいでわたろうとした。

けれども、そのときにはもう、ヌランデリは妻たちのすぐうしろにせまっていた。それでもまだ妻たちが自分から逃げていこうとするのを見て、雷のような大声で海に向かって叫んだ。

高波よ、上がれ！

妻たちは、高波に足をすくわれ、細い地峡から海に落ちておぼれ死んだ。

ヌランデリは、自分も霊の世界に入るときがきたのをさとった。細い地峡を渡り、ずっと西をめざして歩いていった。

まず海のなかに槍を投げ入れ、それから飛びこんだ。やがてヌランデリは海から空へ上がっていき、天の川の星になった。

（ナランジェリ部族・クローロン・キャンプ、南オーストラリア）

物語は、語られるととても短い。短いわりには、とても覚えにくい。ナランジェリ以外の人間にとってはとい

う意味である。ただし語り収めのボタンは、他の民族ももつ天の川の由来譚の収め方と共通している。

ヌランデリが何のために旅をし何をなしとげたのか、もしこの話だけを聞いたのなら判然としないかもしれないが、小論の前章を読まれた方はわかつて頂けるだろう。ヌランデリの旅は、ナランジェリ部族のテリトリの境界線をひくことと、キャンプにむいた土地を用意する旅であった。キャンプをする地には、幾つかの条件が整っていないなければならない。真水が湧いていること、海や川や池には魚があふれていること、差しかけ屋根を作るためにも、カヌーを作るためにも、ユーカリの樹皮が入手できること、道具の材料であるアシやイグサが生えていること。ヌランデリがカヌーで川を下り、キャンプをはって旅したというストーリーは、聞き手にとって、ヌランデリの足跡の残るところ、手ごろなユーカリが育ち、真水が湧いているという意味だ。ヌランデリの旅について知るのは、ナランジェリ部族のテリトリの肥沃な自然についての事典や図鑑の頁をくつていくのと同じである。

ところで、ヌランデリの豊じょうの旅には、二つ不可解な点がある。一つは、魚（トゥカリ）を焼くにおいがかいだけで、どうしてヌランデリには料理をしているのが妻たちだとわかったか、もう一つは、ようやく妻た

ちが見つかったというのに、どうしてヌランデリは高波を呼び起こして、妻たちを溺死させたのかである。前の疑問の答えは、「口頭伝承につきものの様式」だろう。とすると、アポリジナル口伝にも昔話の方程式があてはまる部分があることになる。後の疑問は、平凡ながら倫理的な規定とも考えられる。夫の元から逃げだした妻たちの受ける罰は、死なのもかもしれない。ヌランデリはもともと妻たちを連れ戻すためでなく、殺して罰するために追いかけていたのかもしれない。それとも、女には禁止されている魚を食べた罰なのだろうか。女が所属集団の食物のタブーを犯したために死の罰を受けた話は、日本の口承文芸にもある。それはともかく、高波を起こす呪文を使うことのできるヌランデリが、普通の男のようにどたばたと女を追いかけたのは、そして、魚をねらう槍がはずれたりするのは、英雄のわざからはど遠い。

しかしここで虹蛇をトーテムとする男の話が、二部にわかれていたことを思いださなければならない。虹蛇の話は、前半は女の、後半は男の話として構成されていた。ヌランデリの話の前に、妻たちの話、例えば妻たちがクーナビツビのような役割を果たす部分があったのかもしれないと考えることはできないだろうか。いつからそれが消えて語られなくなったのではないか、その可能性についても調べてみる必要があると思っている。これは推測

による仮定にすぎない。課題にしておきたい。

そこで、逃げまわる妻たちは、ヌランデリを旅に出し、旅を続けさせる動機として登場させられたのだとしておこう。ひどく人間臭く、ロマンのない設定である。しかし口頭伝承は、象徴的あるいは抽象的な内容よりも、男女の追跡というような、または食べ物をめぐって争うというような、もっとも人間臭い次元の話があつてこそ、よく記憶され、よく聞かれるのではないか。ヌランデリが妻たちを高波に溺れさせたのは、ヌランデリの豊じょうの旅が終わりに近づいたので、旅の動機を消す必要があつたからではないか。そのほかに、テリトリリー内を移動するさいの注意事項としての役割もあつただろう。妻たちが転落した地峡は、いまでは海面が上がって海峡になつている。海峡の向こうにカンガル島がある。まだ地続きだったころ、地峡を渡るのはとても危険だったに違いない。妻殺しのくだりは、部族の一同に食料採集の折りなどの注意を喚起するのにも役立っただろう。こうしてみれば、妻たちの死を悼む、あるいは妻たちを死に至らしめた行動を後悔するといった動機が語りからは伝わらないのも理解できる。ヌランデリは、虹蛇をトーテムとした父親と同じ役目を背負わされていたのだ。創造先祖として、人間（ナランジェリ部族のテリトリリーに居住するようにする人々）のために必要な全てを定める旅

が、妻追いの旅だった。

さてヌランデリ譚の最後に、急展開がある。ヌランデリは、もう自分が死ぬ時期がきたとさとする。ヌランデリはカンガル島へ去り、島の西端から海に飛びこむ。いったん海中に入ってから天へ昇り、天の川の星の一つになるのである。

ヌランデリの話は、次のように解釈できる。つまり、ヌランデリには他の部族の創造主と同様、ナランジェリ部族の生活と地理を定め、夢から覚醒した部族が、豊かな贈物を大地より得られるようにしておく責任があつた。だからヌランデリは旅をした。彼の足跡にしたがつて線をひくと、幾つかの支部族を含めたナランジェリ大部族のテリトリリーが決まる。話を伝えてきたナランジェリ部族によれば、このテリトリリーは本来五千エーカーあつたという。現在のナランジェリ部族が使用を許されているのは、二千エーカーである。あとの三千エーカーは牧場になり、風景に二百年前のおもかげはまるでない。

話を聞いただけでは判然としないだろうと書いたが、語りの場がナランジェリの人々だけで構成されているときは、短いストーリーが語られるだけで済んだ。いちいち川のごこの湾曲部といわなくても、共通理解に頼っていられた。けれども、そういった前提は、二百年前からはいよいよに通用しなくなつた。部族は以前の語りの場

を維持できなくなったからである。そこで現代の語りの場に少し触れなければならない。ナランジェリ部族だけでなく、アボリジナルの伝承を護っていこうとする人々、現代オーストラリアでアボリジナルの文化復興運動を行っている人々は、他の文化圏出身者、とくにヨーロッパやアジア系の若いオーストラリア人と伝承を分かち合いたいと思っている。ヌランデリ譚は、部族の中で通過儀礼を経た人々だけが知ることのできる部類の話だったが、現在では関心を寄せる人には誰にでも聞かせる。語るために、学校や集会に出かけていくこともある。サバイバルをかけた語りの旅である。こうしてなるべく多くの耳に入れておくことによって、短く見積っても何千年かの歳月を生き延びてきた伝承を、さらに何千年も生かしておこうというのである。新しい語りの場では、部族の中でだけしか理解されないような語り方ではない。というわけで、口承文芸の近代化がうながされ、具体的に地名や解説が挿入されるようになった。

ヌランデリの話を例にとると、次のような形に変わり、ヌランデリの偉業が、地名などを特定して語られる。

(+印は物語の筋 \*印は挿入される註)

+ヌランデリがカヌーでマレー川を下った。

\*ダーリング川と合流する地点から下流。昔は

小川だった。

+魚のボンデを追いかけた。

\*ボンデは、タラの一種。

+魚は逃げた。

\*逃げながら、魚は現在のように川幅を広げていった。

+魚に槍を投げた。

\*マレー橋のあたり。魚を突きそこねた槍は、ロング・アイランド島(ナランジェリ部族名 ||レンテリン)になる。

+湾曲部でまた槍を投げられた魚は、まっすぐ川を下った。

\*タイレム・ベンド(湾曲部、部族名タガラング)から先、川は直線に長く流れる。

+ネペレ

\*ネペレは二人の妻たちの弟である。

+魚はマレー川の河口から湖へ入った。

\*河口にある巨大なアレグザンドリナ湖。

+トゥカリ

\*ブリーム的一种。ナランジェリ部族の女性たちは、この魚を食べることを禁じられている。

+ヌランデリは、キャンプもカヌーも捨てて、妻をさがしにいった。

\* キャンプのために作った二つの差しかけ小屋は、二つの丘になり、樹皮で作ったカヌーは、天の川になった。

+ 妻たちは対岸でいかだをおりた。

\* いかだは、素材であるアシとグラス・ツリーに戻った。

+ ヌランデリは魔術師を火葬にした。

\* その後には今、花こう岩がごろごろしている。

+ 北へ向かった。

\* クーロン・ビーチに沿っていった。

+ 真水の穴を掘り・・

\* それ以来、その砂地から真水が湧くようになった。

+ 魚をとって食べた。

\* それ以来、クーロン・ラグーンはよい漁場になった。

+ 湾をぐるりとまわって・・

\* エンカウンター湾をまわりビクター・ハーバーへむかった。

+ 巨木を海に投げこんだ。

\* ミドルトンによい漁場を作り、海底に沈んだ巨木に海草が付着するようになった。

+ アザラシを殺した。

\* その断末魔のうなりは、まだ岩のあいだにこだましている。

+ またキャンプをはり・・

\* これはポート・エリオットのあたり。

+ 槍を海に投げた。

\* 場所とはビクター・ハーバー、槍から島々ができた。

+ カイケの岩かげ。

\* カイケは、今のグラニト・アイランド。

+ 浜辺のほうから・・

\* キングズ・ビーチ。

+ 棍棒を地面にたたきつけた。

\* 棍棒は断崖の岬になった（部族名＝ロンクワル）

+ 半島の先。

\* ケープ・ジャヴィス。

+ 向こうがわ。

\* カンガルー島。海面が低いときは、地続きだった。

+ ヌランデリは妻たちのすぐうしろに・・

\* ケープ・ジャヴィス。

+ おぼれ死んだ。

\* 二人の妻たちは、岩だらけのペイジス・アイ

ランズになった。

十西をめざして・・・

＊カンガル島島の西端まで。

こうして整理してみると、＊印の多さが目立つ。話の長さは約二倍になった。＊印は、ナランジェリ部族のリトリにナランジェリ部族の民しかいなかった時代には、必要なかった説明である。盛りだくさんの説明は、ナランジェリの人々の口頭伝承への危機感のあらわれともいえるし、他文化圏出身者の理解がより深まるのを望んでいる証拠ともいえる。そして、第二の覚醒はこうした著しい変化のきっかけだった。

## 五 第二の覚醒

最初の白い海鳥が、オーストラリアのヨーク半島に翼を休めたのは、一六〇六年である。帆船に乗っていたのは、オランダ人ヤンスであった。彼は、「そこは良いことの役には何も立たない」と帰朝報告をした(クラーク一九六三)。当時テレビでもあって、ヤンスの談話がヨーロッパ全土に伝わったら、アボリジナルの夢の時代の伝承に、第二の覚醒もなかっただろう。けれどむしろテレビはなく、あったのは探検家魂だった。スペインからもトレスがやってきた。一六一六年にはオランダからハ

ルトオが、一六四二年と四四年にタズマンが渡来した。イギリスのダンビアが訪れたのはそれから四〇年後、十七世紀末である。多くが幻の南方大陸テラ・アウストラリスの探索航海が目的で、赤道を越えてきた。これらの招かれざる客たちは、大陸やタスマニア島の一部に上陸あるいは視認をし、帰国して様々の勝手な解釈を伝えたのだった。

航海者たちがそれぞれ大陸やタスマニア島の異なる場所所得た原住民の印象を、クラークは手ぎわよく紹介している。タズマン「惨めで、極端に貧しくて敵意に満ちた人間どもだけ・・・大地の産物を見つけようとする者はその上を歩かなければならない。」ダンビア「世界でもっとも惨めな人びと・・・人間の形をした外観を除けば獣と何ら変わるところがない。」(一九六三)

ルソー以前の十七世紀、西欧の人々がイメージするオーストラリア大陸原住民は、当時の探検家の感想がもとになっていた。ダンビアなどの報告を修正したのは、一七七〇年にオーストラリア大陸へ上陸したキャプテン・クックである。けれども十八世紀末から始まった大英帝国のオーストラリア植民地化における原住民対策は、十七世紀の初体験者たちの強烈な印象に影響されていたと思えない。以来一九六七年まで、アボリジニーズは、人口減少、土地の収奪、母語の喪失、伝統の破壊など、

被征服民族のあらゆる苦難を、アメリカ大陸やアフリカの原住民諸部族と分かち合うことになる。

口承文芸も例外ではあり得なかった。強制的な土地の収奪や働き手と女の調達や伝染病や英語の強制は、部族の解体をもたらし、語り部を失い、キャンプファイアという語りの場を失い、多くの口伝が失われていった。

ところが、そんな状況の中でも、新しい語りが生まれた。それはおもに、娯楽を目的として語られる分野における現象である。

アポリジニーズの口承文芸は、創世神話だけではない。日常生活のあらゆる面——食料、医療、道具、儀礼、娯楽——を、伝統的な口伝はカバーしていた。民話や昔話に分類される伝承のキャンプ・ストーリーは、小文では紙幅の都合で紹介しなかったが、こっけいな話やほろりとする話など多彩である。歴史物語もあった。タスマニア島のアポリジナルの歴史譚に、トリゲールII白い鳥II帆船の話がある事実（ロバート、一九七七）は、口伝への改訂版あるいは増補版があったことを示す。口伝にかぎらない。白人の渡来後は、踊りや歌にも、白い鳥や馬が登場するようになった。新しいものや概念を取り入れるアポリジナルの才能は、「失われた夢の時代」後に発生した民話に触れれば明かである。

近代国家建設が始まると、キャンプ・ストーリーが微

妙に変えて語られるようになった。ここにその一例がある。もとの話は、エミューの肉を孫とわけずに自分一人で食べてしまったお祖母さんが、エミューに変身し人間に戻ることができなくなったという筋である。

「ハリモグラ」

むかし、お祖父さんと二人の孫がいた。ある日、お祖父さんは、ハリモグラを料理してやるから、クーラバの葉を集めておいでと孫たちにいった。

孫たちは出かけていった。孫たちはときどき、お祖父さん、ここでのいいの？と大声でいった。けれどそのたびに、お祖父さんは、もっと遠くへ行って集めておいで、とさげびかえた。そして、孫たちがいないすきに、お祖父さんは、ハリモグラの肉を食ってしまった。誰にも見つからなかったと、お祖父さんは安心していったけれど、近所の人々が、このようすを見ていたんだね。

孫たちがふと見ると、お祖父さんの後を、チヨウチヨは、槍をもった小さな男たちだった。

お祖父さん、お祖父さん、槍をもった男たちが、追いかけてくるよ。孫たちはいった。けれどお祖父さんは、なんの男であるものか、チヨウチヨだよ、といった。

チヨウチヨの男たちは、お祖父さんを襲った。孫たち



へのひどい仕打ちのおかえしだ。男たちは、お祖父さんに槍を突き立てた。体じゅうに槍を刺されたお祖父さんは、ハリモグラになった。

孫たちは、どうしたって？ チョウチョの男たちがひきとって、だいに育てたのだよ。

(語り手・マリア・ボニー、

ヨアラライ部族)

短い話ながら暗示されている役割や、新しい状況を口伝の改編にどう託して描いているかが、わかって頂けるだろう。

ざれ歌も作られた。ニュー・サウス・ウェールズ州の黒い人々がいまでも歌っているものを紹介しよう。ロビンソンは、友人のアボリジナルをバイクの後ろに乗せて走っているときにうたってもらったという(一九六六)。

ジャッキイロジャッキイ かしい男

ゆかいで いつもはりきり屋

結婚したくてたまらない

まえの女に逃げられた

クリケタ バブラ ワイルディ マイア

ブレイ ナイア ジインゲリ ワア (繰り返し)

狩人だった ジャッキイロジャッキイ

白人きたから 狩りはできない

故郷は柵でかこまれた

狩りのうでまえ にぶつたら

クリケタ バブラ ワイルディ マイア

いまじゃ 白人の税金で

ジャッキイロジャッキイ ごうせいな暮らし

生まれ故郷の ゆく末なんぞ

知ったことかと むさぼり食らう

クリケタ バブラ ワイルディ マイア

赤字経済だってさ この国は

ジャッキイ 笑いがとまらない

故郷を おかえしいたしましょう

いまさらなんだよ 白人さん

クリケタ バブラ ワイルディ マイア

ジャッキイロジャッキイ エミュー狩り

槍と 棍棒のつかい手だった

ジャッキイだけが 知っている

エミューとカンガルーのものがたり

クリケタ バブラ ワイルディ マイア

オーストラリアはイギリスがECに加盟したあと、貿易相手国をアメリカとアジアに求めているが、失業率も高く赤字経済に苦しんでいる。それでも建国以来の伝統である平等主義の理想は崩したくない。ジャッキ・ジャッキのような失業者に納税者が手当を払う。近代国家を建設した移住者は、スケールは違っても、生存のために旅をした人々であった。そこにはヌランデリの旅と相通じるものもある。けれども、「ジャッキだけが知っている エミューとカンガルーのものがたり」とうたわれるように、この大陸をよく知っていたのはアボリジナルであり、新しく渡来した人々、エミューもカンガルーも初めて見るという人々にとっては、辛い厳しい暮らしを強いられた土地であった。オーストラリアには、世界で最初の無記名投票を行った国、整った福祉社会であるとの誇りがある。けれども、いまだかつてこの大陸の恵みを完璧に享受できたのは、アボリジニズ以外にいないではないかという告発が歌を借りてなされている。エミューとカンガルーのものがたりを知る人々は、土地と付き合ひ、土地に関わる特長を学んだ結果をきちんと子孫に伝えていく知恵をもっていた。繰り返しになるが、生存を左右する知恵袋とはむしろ口頭伝承である。

白い鳥で始まった侵入は、充足したアボリジナルの歳月を断ち切った。覚醒は一回では済まなかったのだ。十

七世紀にまた、夢から揺さぶり起こされた。けれど、第一の覚醒はアボリジナルの精神世界の内部における必然的なそれであったのに対して、第二の覚醒は、アボリジナル宇宙の崩壊につながるものだ。しかし、新たに発生し口伝されている話に触れると、アボリジナルの柔軟性や改革精神が救いであつたことがわかる。

それだけではない。一九七〇年代以来アボリジナルは、部族の父祖の地の返還をもとめ、伝統文化の再興に努力している。部族によって個人によって手だては異なるものの、めざすところは同じ、第二の覚醒以前に戻ることである。第二の覚醒がなければ、どんなによかっただろう。私たちはどんなに昔の暮らしに戻りたいと思っているか、願いは強烈なんです、とヌランデリの子孫も語っていた。けれども、私たちの惑星が一つしかなく、その上に発生する文化の過程が様々に異なる中、ある文化が魔物のいる海を越える道具を発明したと責めることはできない。アボリジナルが石器文化しか発達させなかったと非難がましくいわれる必要のないのと同様、船の発明を非難しても仕方ない。混乱を経て、いまアボリジナルたちは、動きだしている。

これまで述べてきたように、口頭伝承の中の、夢の時代から覚醒する時期に焦点をあてて語りつがれてきた話群は、地勢の学習を含めたアボリジナルの生活の知恵の

ガイドブックであった。大陸の景観も開発によって変化した。が、それでもこの地に居住し続けるかぎり有効な教えもあるはずである。

大陸に住む四〇以上の民族の中で、アボリジニーズはもっとも少数派になった。それだけではない、私のように空を飛ぶ鳥に乗ってやってくる人々すらいる。こうなると改訂版は、世界中の不特定多数の人々を想定して作られなければならない。さきに示した註つきの語りはその一例である。第二の覚醒は、こういう変化を余儀なくさせた。

## 六 ナランの人

ナランの人々に会った。ナランとは、カジュアリーナの木のアランジェリ名である。アランジェリ部族の人々の精神的な支柱は、四章に登場したヌランデリだ。神話にはないが、ヌランデリは他界へ旅だつ前に、ナランの木の下で一刻をすごした。ナランには、細い枝に針のような葉がついている。下を向いたその葉が、風に吹かれると泣き声のような音を立てる。ヌランデリは、この世界を去るのが、人間を残して去るのが悲しかったのだと、アランジェリの人々は信じている。そして木の下にすわると、覚えておくべきことを思い出すという。人間はテリトリ―とする土地や、そこに生きる人々や、動植物の

世話をする義務があることを思い出す。思いだしながら、励まされる。アランジェリ部族の長老の家族に、クローン・キャンプを設立して、そこをアランジェリ文化の保存と広い文化交流のセンターにするアイデアと気力を与えたのは、このナランの木だった。

ナランの人々がもともと熱を入れているのが、子どもたちの教育である。彼等が学校へ通っていたころは、キャプテン・クックがオーストラリア大陸を発見したと教師はいい、歴史の勉強はそれでおしまい。自分たちの先祖が太古からここにいたことは何も教えてくれなかった。最近アボリジナル・スタディーズが教科に加えられた。しかし担当する教師も、何を教えたらいのかわからない。図書館へ走っていった手当りしい本をつかみだし、適当に教える。そうやって、子どもの内に混乱を起こす。

クローン・キャンプでは資料を充実し、子どもたちを招く。アシやグラスツリーのかご編みを実演して見せ、ブーメランを手に取りさせる。楯に彫られた文様の説明をする。キャンプストーリーを語る。時間のかかる伝統教育だが、アボリジナル文化は時間を気にしない。何万年もの歳月をこの土地ですごしてきた自信が、そういう態度を取らせる。ゆっくりと確実に浸透していくようなやり方が、彼等に合っているのだらう。

話をしてくれたナランジェリ部族の人々は戦後生まれだが、現在元の五千エーカーあったテリトリーのうち、二千エーカーを返してもらい、キャンプを建てた。一帯は国立公園の中にある。あとの三千エーカーが牧場用地として取り上げられたのはいいとしても、牧場経営者たちは牧草を育てるために、良質の湿地をかんがいで淡水を海に流すので困っている。隣接するクローンの土地に塩が上がつてくるからだ。

ヌランデリのブッシュを私も歩いた。正直に言えば、ヌランデリの創造した土地に足を踏み入れたとき、その貧相さにショックを受けた。土は白っぽい。荒涼とした砂漠に、細く低いユーカリ樹がぼそぼそ生えている。視覚的な美意識に訴える要素は少ない。それでも、案内しながらナランの人は、木や草の名や薬用効果を教えてくれた。食べなさいといって、実を次々と摘んでくれる。そのときの手つきは、宝石箱の中からとっておきの宝石を取り出すかのような感じだ。長い間歩いても喉が渇かないようにこれをなめていなさいと、マツヤニのような塊をわたされた。頭痛がするときは、この葉をもんで枕の下に入れなさい（私が少々参ったというような顔をしていたのかもしれない）。おなかがすいたの、これを食べたら。目の前にも左右にも後ろにも、愛想のないまばらなブッシュだけが広がる。ナランの人は、白人が土地を

かんがいする前は、土地はもっと肥沃だったし、植物は繁茂したのだけれどといいつつも、手品師のように、甘い蜜の吸える花を摘んでくる。意外に豊かな土地なのだ。「学校の生徒をトレッキングに連れてくるけれど、子どもたちは何も知らない。この植物は食べられるとか、これは薬草になるとか、これで武器が作れるとか教える。」

やわな食物に馴れている私だが、硬い実を必死に噛み砕いているうちに、内心ヌランデリの周到さに驚きを感じてようになった。夢の時代に書かれたすぐれたガイドブックは、その伝承を信じる人を絶対に飢えさせないように配慮してあったのではないか。アボリジナルのドリーミングから、宇宙観を解説するのもよいだろう。だがアボリジナルの口頭伝承は、人間が生きてし生けるものの一員であることを、大地のものであることを基本においているのではないか。アボリジニーズが第二の覚醒を生き延びることができたのも、排他性と始祖帰性を克服したのも、当然なのだ。今アボリジナルは、「多民族多文化社会」のオーストラリアにおいて、「他民族他文化」との協調と理解を、最優先にしている。具体的に言えば、かつての王国へくる訪問者たちにこんなふうに語りかける。

「土地は母親でした」と、ナランジェリ部族の人々はまずいう。食料の問題だけではない。テリトリーの境界

線は、結婚のためにも大切な問題だった。近親婚が起らないように、テリトリートーテムを守らなければならない。ただし、結婚生活がスムーズにいくように、息子たちや娘たちが結婚する可能性のある部族同士は、たがいに往来して意志の疎通を怠らなかつた。

境界線について、文献で読んだことのないおもしろい話も聞いた。ランナーの話である。穂先に網をつけた槍をもったランナーは、いつでも境界を越えることができた。槍は入場券のようなもので、テリトリートーテムからテリトリートーテムを走り、コロポリーがどこでいつ開催されるかを触れてまわるのだという。このニュースを聞いた集団はただちに旅のしたくを始め、一か月から三か月ぐらいのあいだに全メンバー集団がヤンタワラン（集会地）に勢ぞろいした。そこでは歌や踊りだけでなく、結婚式や通過儀礼が行われた。

テンディ（議会）も開かれ、選挙も行われた。全集団を統轄する議長の選出である。また小さい集団（支部族）も指導者を選んだ。オーストラリア連邦と何ら違いのない、近代的で民主的でソフィステケイテッドな制度が機能していたという。ただし、議長は男に決っていた。首長はそう説明しながら、でも今では、女が夫に、あなたが赤ん坊の世話をし食事を作りなさいというね、とユーモアでしめくくることも忘れない。

誰が悪いことをしたとき、すぐにひつとらえて、罰するということはいらないほうがいい。私たちのやり方はこうです。部族のみなが集まって火を起こしそのまわりにすわる。そうして歌をうたう。たくさんうたう。いろいろの事柄、結婚に関する歌、狩りに関する歌。歌の歌詞は、掟について述べている。こうして夜、みんなでキャンプファイアのまわりにすわって、歌をうたう。聞いている者は良心の痛みをおぼえる。それで悪かったといえば、それでいい。許される。けれども、そういう集まりを一回、二回、三回とやっても、三回までやっても悪かったといわなかったら、罰が下される。とても厳しい罰ですよ。

クローン・キャンプを訪れた人は、ナランジェリ部族の社会が、十七世紀の白い海鳥の乗組員たちの印象と違って、どの社会とも同じであることを知る。あたりまえのことを知って、あたりまえの安心感を抱いて去る。それはきっと明日の共感につながるだろう。

第二の覚醒を経て、アボリジナルの神話も、伝統的な語りの場で語られることはなくなった。ナランの木が小さいなりに育とうとしているように、ヌランデリの話も、語られ聞かれるなりに伝わっていくだろう。聞き手たちはたくさんの註を付けなければわかってくれない。けれども、付ければわかってくれるではないか。テリトリートーテム

が違ふ人々でも、黒くない人々でも、聞き手となることがある。ヌランデリにとつても、新しいスタートだ。生存のために精一杯の一日一日を重ねるようにと語りつがれてきた話群は、どうやら第二の覚醒もみごとに乗り切るように思われる。

## 七 おわりに

オーストラリア原住民について、アボリジナルとアボリジニーズの呼称を用いた理由について説明したい。二つある。一つは言語学者山崎真稔氏の教示による。「ラテン語の複数名詞 Aborigines およびそれに由来する

Aboriginal (単数名詞、形容詞) と Aborigines

(複数名詞) の使用が望ましい。日本では「複数名詞アボリジニーズの単数名詞としてのアボリジニ」がよく使われるが、それは本来単数形のないラテン語の特性を無視しており、正用法に従ったほうがよい」という説である。文中、アボリジナルは、英語で書けばアボリジナル・ピープル、アボリジナル文化など形容詞として使うさいに、アボリジニーズは、アボリジナルの人々を集めた表現するさいに用いた。もう一つの理由は、ナランジェリ部族の人々から、「(ナランジェリ・) アボリジナルズ(という呼称) または複数名詞アボリジニーズを我々は受け入れている」と聞いたからである。

紙幅の都合で、南オーストラリア州最大の部族ナランジェリの人々から聞いた部族の近代史は紹介しなかったがカットし、豊かな神話群も数を絞り短くしたりした。つながりの悪いところのある試論になったことを反省している。

小文は私にとってアボリジナルの口頭伝承について、今後すべきことを認識するきっかけとなった。タスマニア・アボリジナルの伝承についても、今回は詳しく綴る余裕がなかった。また、おもしろいことが見つけれれうな予感もする。例えば、ビッグバンから石器文化までの過程を、アボリジナルはすいぶん解明していて独自の表現で表しているのではないか、などなど。

土地と人間の関わりを実感できたのは、オーストラリアの旅のいちばんの収穫だった。人間と移動の関わりといつてもいい。人類は盛んに旅をしてきた。大航海時代の人々とアボリジナルの旅は似ていないところもあり、似ているところもある。アボリジナルは宝物探しを目的の旅はしないけれども、サバイバルのための旅はする。だが、西欧の探険家たちの背後にも似たような必要性があったのかもしれない。人間の本性についていえば、故郷の土地や空気や光や風景をこよなくとおしむ人々がいる一方で、どこでも気軽に落ち着いてしまう民族もある。旅が重要なファクターであるアボリジナル文化だが、

心情的に彼等は前者に属している。

都会から奥地まで、現代を生きるアボリジナルの人々をいちばんよく知っている日本人は、おそらく中野不二男氏だろう。彼が刺激的な著書の中で描くシドニーのレッドファーン地区のアボリジナルの姿(一九七九)と、クローン・キャンプのナランジェリ部族の姿がひどく違うことを、気になさる向きもあるかもしれない。しかし「ジャッキルジャッキ」はレッドファーンの人々が伝承させている歌でもある。

アボリジニーズが自分の足で移動できる各テリトリーは、広大な範囲にわたっている。ブッシュから戻って、自分の足でたしかめていく、そんな仕事をしなさいと励まされたように思う。

ナランジェリ・アボリジナルの皆さんおよび今回の貴重な出会いを可能にして下さった、私の尊敬する文筆家に感謝の念を申し述べたい。彼は、ナランの人々の聞く風の音を聞くことのできる人である。

引用出典及び参考文献

M. Clark, *A Short History of AUSTRALIA*,  
Penguin Books, 1963  
M・クラーク『オーストラリアの歴史』竹下美保子訳、  
サイマル出版会、一九七八

K. Sinclair, *A History of New Zealand*,

Penguin Books, 1959

M. Panoff, *Mythologie d'Océanie*, in :

P. Grimal(ed), *Mythologies des montagnes, des forêts et des îles*, pp 212-229, Librairie

Larousse, 1963

M・バノフ、大林太良他著『無文字民族の神話』白水社、

一九八五

R. Robinson, *Aboriginal Myths and Legends*,

Sun Books, 1966

『悪魔の大エリンチャ』百々佑利子編訳、小峰書店、

一九八六

R・バルバース、戯曲『ドリームタイム』ラボ教育セン

ター、一九八四

J・ブレイニー『アボリジナル』越智道雄訳、サイマル

出版会、一九八二

S・モーガン『アボリジナルの文学』国際経営フォーラ

ム3号、神奈川大学、一九九一

*Ngunuweri: An Aboriginal Dreaming*, The South

Australian Museum, 1989

B. Roberts, *MANGANINIE*, Macmillan, 1979

N. J. B. Plomley, *The Tasmanian Aborigines*,

Adult Education Division, Tasmania, 1977

J. Clark, *The Aboriginal People of Tasmania*,

Tasmanian Museum and Art Gallery, 1983

山崎真稔「ことばの事典」、『南半球評論』7号、オー

ストラリア・ニュージールランド文学会、一九九一

中野不二男著『アボリジニーの国』中公新書、一九八五